

ベネディクト・アンダーソン 『想像の共同体』－ナショナリズムの起源と流行－
Imagined Communities - Reflectins on the Origin and Spread of Nationalism
Benedict Anderson, 1983

彼は、自らの仕事を歴史を逆撫ですることとみなしている。

－W. ベンヤミン『歴史哲学テーゼ』

かくして 全ての種族の混淆が始まり
あの異った部分からなるもの イギリス人が生じた
強姦への熱狂 そして強烈な情欲が
化粧をしたブリトン人とスコット人の間に芽生え
彼らの間に生まれた子供が 速やかに屈従することを学んだ
そして彼らの雌牛達にローマのくびきをかけ 大地を耕した
やがてどこからともなく半分彼らの血を受けた混血児がやってきた
名も国もなく 話すこともできず名声ももたずに
彼の中の昂ぶった気分から 怒涛のような新たな混淆が迸り
それがサクソン人とデーン人の間に注ぎ込んだ
彼らの身分高き娘達と同様に まさに彼らの両親達も
あらゆる国々との乱交を引き受けたわけである
この胸糞が悪くなるような子供達がまさに
イギリス人の血の精髓たる部分をも覆い尽くしているのである

－ダニエル・デフォー『イギリス人の起源』より

I 序

まずは、1983年という、この書の発表年を銘記しなければならないだろう。この書が最初に告げようとするのは、マルクス主義及びマルクス主義運動の歴史に生起しつつある根底の変容という（今となってはあまりにも明白な）事態である。その最初の兆候として、ヴェトナム、カンボジア、中国の間の戦争が召喚される。この戦争を、ここで「革命的マルクス主義体制の、革命的マルクス主義体制に対する、最初の大規模な通常戦争」(p.11) という仮説の下に規定することで、ソヴィエト連邦を除く、第二次世界大戦以降のあらゆる革命が、「みずからを国民的<national>用語で規定してきたこと」

や、それによって「革命以前から継承した領土的、社会的空間にみずからを確固として定置したこと」といった今まで見過ごしにされがちであった事実が指摘される。

こうした国民的、国民主義的＜nationalist＞傾向は、しかし社会主義世界にのみ限られた現象ではなく、国民を構成するということ＜nationness＞は、「我々の時代の政治生活におけるもっとも普遍的で正当的な価値となって」（p.12）おり、実際、「ナショナリズムの時代の終焉」は地平の彼方に垣間見ることすらできない、というのが紛れもない現実なのである。

しかし、このように明快な事実に対する説明は、長く不毛な論争につきまとわれていると言う。アンダーソンは、これに英語圏における代表的な自由主義史学（ヒュー・シートンワトソン）とマルクス主義史学（トム・ネアン）の言説を取り上げることで触れているが、そこにみられるのは、いずれについても、ナショナリズムに対する理論的認識の不可能性への慨嘆に過ぎないものであることを指摘している。

このような諸言説におけるナショナリズムの位置づけに、アンダーソンはひとまず「変則」（p.13）という呼び名を与えている。それは、いずれの言説においても「ナショナル・ブルジョワジー」の分割が理論的意義を示しながらも、それを説明することができない（或は説明しようとししない）という態度となって現れている。

このような事態を前にして、アンダーソンは本書の理論的出発点を「ナショナルリティ、あるいはこの言葉が多義的であることからすればネーションネスと言ってもよいが、それがナショナリズム〔国民主義〕と共に、特殊な文化的人造物であるということ」（p.14）に置く。そしてそこから、ナショナルリティ、ナショナリズムといった人造物が、歴史的諸力が交錯する中で、18世紀末に創り出され、モジュール化し、多様な政治的パターンと合体し、人々に深い愛着（attachment）を引き起こすようになった。これを論じるのが本書の目的であるとされている。

【概念と定義】

「国民」＜nation＞概念を廻って、これまでナショナリズムの理論家達が躓きの石としてきたのが次に掲げる三つのパラドックスであるとアンダーソンは言う。

- ① 歴史家の客観的な目には nation が近代的現象とみえるのに、ナショナリストの主観的な目にはそれが古い存在とみえるということ。
- ② 社会文化的概念としてのナショナルリティ〔国民的帰属〕が形式的普遍性をもつのに対し、それが、具体的にはいつも、手の施しようのない固有さをもって現れること。
- ③ ナショナリズムの「政治的」影響力の大きさに対し、それが哲学的に貧困で支離滅裂だということ。

～ナショナリズムは、ホッブス、トクヴィル、マルクス、ウェーバーといった如何なる大思想家をも持たなかった。

アンダーソンに拠れば、このような混乱の原因は、「大文字のNで始まるナショナリズムの存在を実体化し、その上で「それ」をイデオロギーの一つとして分類しようとする」(p.16) ことから生じる。だから「**nation** と **nationalism** は、「自由主義」や「ファシズム」の同類として扱うよりも、「親族」や「宗教」の同類として」、人類学的に扱うべきものであるとされる。そして、**nation** は次のように定義される。

++ **nation** とはイメージとして心に描かれた＜imagined political community＞想像の政治的共同体である—そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なもの〔最高の意志決定主体〕として想像されると。(p.17)

ルナンとゲルナーの言葉が引かれ、すべての共同体は想像されたものとしてのみあり得、それらの区別は、「それが想像されるスタイル」(p.18) によってもたらされることが言われる。ジャワやアンシャンレジーム下のフランスでは、個人を中心に、親類や主従関係の無限に伸縮自在なネットワークとして想像されていたものが、今日では全く異なる想像のスタイルの下に置かれている。

アンダーソンは **nation** における想像のスタイルを、次のような三つの特徴を挙げて素描してみせる。

- ① **nation** は限られたものとして想像される
- ② **nation** は主権的なものとして想像される
- ③ **nation** は一つの共同体として想像される

そしてアンダーソンは、このように想像されたものが、今日途方もない死と暴力を出来せしめていることを見据えようとしている。

++ これらの死は、我々を、ナショナリズムの提起する中心的問題に正面から向かい合わせる。なぜ近年の（たかだか2世紀にしかない）萎びた想像力が、こんな途方もない犠牲を生み出すのか。そのひとつの手掛かりは、ナショナリズムの文化的根源に求めることができよう。(p.19)

II 文化的根源

「無名戦士の墓と碑」(p.24)、アンダーソンはここに「近代文化としてのナショナリズムの表象」、そして「鬼気迫る国民的想像力」を読み取っている。そこに窺われるの

は、死と不死とに相関するナショナリズムの想像力という仮定であり、その想像力が「宗教的想像力と強い親和性」(p.25)を示すという確信である。だから、ナショナリズムの文化的根源を考察することは、先ず「あらゆる宿命のきわみとしての死」の考察として始められる。

私が私であることの逃れられぬ所与性、この不可避の、私はかく在るようにしか在り得ないという運命性。そして避けられぬ死。これを説明しようとするのは宗教であり、「すべての進化論的／進歩主義的思考様式の弱点」(p.26)は「このような問いに対して苛立たしい沈黙でしか答えないことにある」と言う。

アンダーソンがこういった考え方に言及するのは、18世紀が、ナショナリズムの時代の夜明けであると同時に、宗教的思考様式の黄昏の時代であるためであり、宗教信仰の退潮はしかし、その信仰が幾分なりと鎮めてきた苦しみを持ち去ることはなかったということである。この時、そして今も、それまで宗教が果たしてきた、「運命性」の「連続性」への、「偶然」の「意味あるもの」への変換という目的に、nationの観念ほど適合するものはなかった、というのである。

「新しく」「歴史的」なものである nation state が、「はるかなる過去から無限の未来へと漂流する」(p.27)永遠性へと接合されてしまう。アンダーソンは、これを「ナショナリズムの魔術」と呼んでいる。彼はこれを、「ナショナリズムを自覚的な政治的イデオロギーとして論じるのではなく、ナショナリズムに先行する大規模な文化システムと比較して理解されなければならない」こととして提起する。

こうして、「宗教共同体」と「王国」という二つの文化システムが問題とされる。

【宗教共同体】

「モロッコからスールー諸島にいたるウンマ・イスラム、パラグアイから朝鮮半島にいたるキリスト教世界、スリランカから日本にまたがる仏教世界。これら広大な領域的広がりを持つ偉大な聖なる文化」(p.28)は、その聖なる言語と書かれた文字を媒体とすることで、初めてその想像可能な共同性を帯びるようになったという。けれどもアンダーソンは、これらの「聖なる言語で結ばれた古典的共同体」(p.29)と「近代国民の想像の共同体」との明確な違いを、「古い共同体がその言語の固有の神聖性に揺るぎない自信をもっていた」点、つまり「誰をこの共同体の成員と認めるか」ということに対しての考え方の差異として描出する。

ここでアンダーソンが目指するのは、聖なる言語、聖なる文字、「真実語<truth language>としての教会ラテン語、コーランのアラビア語、科举の中国語」(p.31)といった言葉に備わった、「記号の非恣意性」(p.30)ということである。これら真実語は、「現実の直接放射であって、現実の任意に作り上げられた表象ではなく」(p.30)、ただ一つの特権的表象システムとして、これらの世界的共同体の想像を担っていたという

のだ。アンダーソンは、これに「錬金術的吸収」を意味する「改宗への衝動」が孕まれていたのだと説いている。

だが、このような宗教共同体の「実際の範囲と妥当性は、聖なる文字だけでは説明できない」という。これを十分に説明するためには「文人と社会の關係に目を向ける必要がある」(p.32) というのである。

アンダーソンがいう「文人」とは、「神を頂点とする宇宙の秩序のなかで、戦略的な階層を構成した」神の言語（ラテン語等の真実語）の達人であり、彼らの存在が、例えばヨーロッパにおける、教皇権を中心とする求心的、階序的社会秩序を支え、俗語とラテン語の仲介が即ち地上と天上の仲介を成すというような世界観念の紐帯となっていたものである。

だが、このように整序されていた宗教的想像による共同体も、中世以降、確実に減衰していく。その原因については、多様な歴史的要因を挙げることができようが、ここでは、「この共同体に特有の神聖性に直接関る二つの理由のみ」が強調される。

その第一点は、ヨーロッパによる非ヨーロッパ世界の探査、所謂地理上の発見の影響であり、第二点は、聖なる言語それ自体の格下げという事態である。

前者については、「13世紀末のヴェネチアの善良なキリスト教徒」(p.33) マルコ・ポーロの意図せざる記述が、フビライ汗の世界宗教に対するふるまいの内にキリスト教信仰を最上級の真実性に見なす所作を読みとってしまう事例に窺える「きたるべきナショナルリストの言語を予示する信仰の領土化の萌芽」(p.34) と、18世紀のペルシャ人旅行家「リカ」の手紙という、モンテスキューによって捏造された文書に見られる、意図的かつすぐれて政治的な信仰の「相対化」と「領土化」という対照的な事例を通して触れている。

後者については、「出版資本主義<print capitalism>」(p.35) が中心的役割を果たしたことについては議論を待たないが、それは後述するものとして、ここでは、その変化の規模と速度についての指摘がなされる。それは、17世紀における出版語としての俗語の爆発的な勃興として現れる。アンダーソンは、これをヨーロッパにおけるラテン語の没落を例として素描してみせるのであるが、そこにおいて、「旧い聖なる言語によって統合されていた聖なる共同体が徐々に分裂し、複数化し、領土化していくというより大きな過程」(p.36) が例証されるのである。

※ ここで、最近の柄谷行人が展開しているナショナリズム論の一端を瞥見しておくことは無駄なことではないと思う。彼のナショナリズム論とは、『日本近代文学の起源』(1980)の仕事に端を発し、今日、その延長線上で繰り広げられている議論のことである。

明治の急速な近代化のなかで見出された、「内面」「風景」「告白」といった文学的諸制度の成立と発見が、その成立と同時に、それまでの歴史を一挙に転倒し、その成

立の起源を忘却させるような新たな遠近法として作動する。一般に、『日本近代文学の起源』がもたらした知見として評価されているのは、このような了解であるような気がするが、この本は果たしてそんな解りやすい本だったのだろうか。

例えば、そこで柄谷が「風景」と呼んだのは、認識論的布置の総体を構成するようなものであった訳だが、それは今、当り前のように用いられている、エピステーメーやパラダイムといったものと直接比較できるようなものではないと思う。われわれが今日、少しでもそれを解ったような顔ができるとするなら、その半分位は柄谷のおかげかもしれないが、柄谷の描き出す「風景」とそれらの西欧的思考規範を概念化しようとしたターム間には幾つかの屈折が存在すると考えられる。当時の柄谷は例えば次のように書いている。

私の考えでは、「風景」が日本で見出されたのは明治二十年代である。むろん見出されるまでもなく、風景はあったというべきかもしれない。しかし、風景としての風景はそれ以前には存在しなかったのであり、そう考えるときにのみ、「風景の発見」がいかに重層的な意味をはらむかをみることができるのである。

漱石はちょうどこの過渡期に生きたといつてよい。むろんそれを過渡期とよぶのは歴史主義的な見方にすぎない。実際は、彼は、英文学を選択したあとで、彼自身において認識の布置が根本的に変わってしまったことに気づいたのだ。英文学と漢文学は、彼のなかでけっして静的な三角関係を形成したのではない。『それから』の代助と同様に、漱石はあるとき突然に彼がすでに選択してしまっていたことに気づいたのである。つまり、「風景の発見」は、過去から今日にいたる線的な歴史においてあるのではなく、あるねじれた、転倒した時間性においてある。すでに風景になれてしまった者は、このねじれをみることはできない。漱石の疑いはここにはじまったのであり、「英文学に欺かれたるが如き不安」は、いわばこの「風景」のなかにあることの不安である。

(『日本近代文学の起源』－「風景の発見」、p.17～18)

「すでに風景になれてしまった者」とは、いわばわれわれの全てを対象とする言葉であり、ここで言及されている漱石や、このねじれの「起源」を指摘しようとしている柄谷自身でさえ、その内部に包みこんでしまう言葉である。柄谷は、まるで見ることができない、というよりも本来視線の対象とはなり得ないものを、「風景」を構成する何ものかへの強い疑いとして喚起しようとして、そこに苦し紛れに「ねじれ」という言葉を当てはめているかのようにみえる。だが、この「ねじれ」の認識こそが柄谷のこの叙述に決定的な動因を与えている。

この本の英訳本の序文で『政治的無意識』の著者フレドリック・ジェイムソンが指摘するように、この叙述は、「われわれの社会的、心理的イリュージョンのもつとも

根本的なものに突き当たっているという意味で重大である」(『異なる近代を鏡として』～「批評空間」第Ⅱ期1号所収)。しかし、ジェイムソンはそれを「内面、中心化された主体、心理的なもの、そして耐え難く西洋的な意味での「自己」(同前)と呼んでみせることによって、この叙述が孕むクリティカルな側面を薄めてしまっている。だが、このような意味の変質に耐えることもまた批評に科せられた不可避の要請なのであろう。ジェイムソンの読みは、そうあってしかるべきもののなのだ。

そして、近年のナショナリズム論では、「風景」や「内面」といった、文学的諸制度の成立が、**nation state**としての「日本」の成立そのものを促し、司ってきた作用であるとの認識において語られている。確かにその語り方にはある種の変化がみられる。だが、そこで語られているのは、依然として、可視と不可視が交叉する危機的な批評の場所の意義であるように思う。その意味で柄谷の態度は愚直なまでに一貫していると思う。

例えば、『日本近代文学の起源』を書いた当時を回顧しつつ、デリダの『グラマトロジー』で指摘される「音声中心主義」が、決して西洋形而上学のみには特有のものではない筈だというデリダへの批判から説き起こされる、「エクリチュールとナショナリズム」(『ヒューモアとしての唯物論』所収, 1992)において、次のような問題設定がなされる。

第一に、音声中心主義は、「西洋」に限定されない問題として考察されねばならない。第二に、日本の国学がそうであるように、それは近代のネーションの問題と切り離しえない。日本において、ナショナリズムの萌芽は、何よりも、漢字文化圏のなかで、表音的なエクリチュールを優位におく運動のなかにあらわれた。しかし、これは日本に特有の事態ではない。ネーションの形成においては、時差はあっても、世界的に、例外なく、こうした問題が生じているのである。したがって、日本の事例を歴史的に考察することは、多くの日本の学者がそれを日本のユニークさに還元しているのとは逆に、エクリチュールとネーションの問題をより普遍的な相において見ることになるだろう。(p.54)

このような問題設定に基づき、柄谷はネーション成立の大きな基軸を、やはり、出版語としての俗語の成立においてみている。それは「規範的な共通語(エクリチュール)」としての「世界帝国」の言語に対して生起するものであり、音声中心主義には、帝国に対するネーションの政治的動機があるのだ、と言っている。

柄谷の論法は、**nationalism**を成立させるメカニズムは、徹頭徹尾、美学・文学的作用にあるとするものであり、あらゆる局面に見え隠れしつつ機能している、美学・文学を「超越論的に」批判するスタイルを取る。だから、決してアナロジーではなく、「文学の風化」と言われるような現在の退屈な風景は、「文学」が制度そのものに

なりおおせて遍在していることを明示する記号として捉えられる。柄谷は、それゆえそこに **critical space** を拡こうとするのであろう。

少し先走ったことを書いてしまったが、柄谷のナショナリズム論と本書は、かなりの部分でパラレルな議論を構成しているように思われる。その差異を読み解いていくのも、それなりに興味深いことではないだろうか。

【王国】

ここでなされるのは一種の王権論であるが、そこでモデルとされるのは、西欧の前近代的王権のものである。ここでは、天皇制という特殊な王制の下にあるこの国において、つい先頃流行った特殊日本的な「王権論」を、一先ず忘れることが必要かもしれない。何故なら、そこには明らかに「日本のポストモダン」という事後的な映像が投影されているからである。

それはともかく、アンダーソンは、前近代的王権を当時そう感じられていたように捉えることの難しさを挙げつついながらも、その特性を次のように列挙していく。

++ 王権はすべてを高き中心のまわりに組織する。王権の正当性は神に由来し、住民に由来するのではない。住民は、とどのつまり臣民であって、市民ではない。近代的概念にあっては、国家主権は、法的に区分された領土内の各平方センチメートルに、くまなく、平たく、均等に作用する。しかし、国家が中心によって定義された旧想像世界にあっては、境界はすけすけで不明瞭であり、主権は周辺にいくほどあせていって境界領域では相互に浸透しあっていた。(p.37)

しかし、ここで特に強調されるのは、こうした王朝が、戦争の他に、主要な自己拡大の手法として、婚姻に基づく性的政治を展開したことである。そこでは、「王の血統は、神々しさの他に、いわば雑婚を、威信の源と」(p.39) しており、どこの「国籍＜nationality＞」にも帰属し得ない「雑種」であるということが「至高の地位を示す記号」となるのである。

こうした王国の「自動的正当性」は、やはり 17 世紀以降、次第に衰退していく。しかし、それらの王朝は 20 世紀に至ってもなお、世界の政治システムの主要な形態の一つとして存続している。けれどもそこでは、血統という旧き「正当性」の原理の衰退にとって代わるように、「国民的」意匠を身に纏うようになる。

その転換を象徴するのが、例えば、フリードリッヒ・ウィルヘルム三世がしろしめす軍隊が、すべて「プロシア国民」のみで構成されたといった事態なのである。

【時間の了解】

このようにして、想像の国民共同体と直接比較されるべき、「宗教共同体」と「王国」という二つの文化システムの、歴史的変遷が概説された訳だが、アンダーソンは、単に、これらの衰退が国民的想像力にとって変わった訳ではなく、その底流における、「世界理解の様式に根本的変化が起こり」(p.41)、それこそが **nation** を「考える」ことを可能にしたのであると説く。

アンダーソンは、この変化を「時間観念」(p.43)の変容として捉えようとする。アウエルバッハが『ミメシス』のなかで描写した、キリスト教世界における、「神の配慮」による、永遠なる「同時性の観念」の成立。「いま」と「ここ」が、過去もそうであり、未来もそう成就するであろう、連鎖の常住不変な態様。ここで「同時性の観念」と呼ばれるのは、「ベンヤミンがメシア的時間と呼ぶ、即時的現在における過去と未来の同時性」(p.43)として形成されたというのである。そしてそれは、「我々自身のもつ同時性の観念」とはまったく異質なものであることが、アウエルバッハに倣って強調されている。

そしてこれに対して、我々における「同時性の観念」こそが、「ナショナリズムの成立にとって決定的な重要性をもつ」ものなのだが、その成立過程は未だ十分には解明されていないと見なされている。一先ずここでも、ベンヤミンが用いた「均質で空虚な時間」という規定のもとに、その同時性は、「横断的で、時間軸と交叉し、予兆とその成就によってではなく、時間的偶然によって特徴付けられ、時計と暦によって計られるものとなった」(p.44)とされている。そして、このような時間観念の変容が **nation** という「想像の共同体の誕生」にどのように関わっているのかが、18世紀ヨーロッパに成立した、「小説」と「新聞」という二つの想像の様式の基本構造を考察することによって示される。

先ず、小説の例としては、単純な小説のプロットを示し、そこで互いに出会うことのない作中人物が、ある関係づけられた者として読者へと差し出され、読者もまた、それを当然のものとして了解できるような地平があることが示される。この関係づけを構成するものとして、アンダーソンは「二つの相互補完的な概念」(p.45)を提示する。その一つが「社会」へのはめ込みであり、今一つが読者の知覚へのはめ込みである。ここに現れている事態は、これによって成立した想像の世界の新しさを示すものである。

++ 社会的有機体が均質で空虚な時間のなかを暦に従って移動していくという観念は、国民の観念とまったくよく似ている。国民もまた着々と歴史を下降し（あるいは上昇し）動いていく堅固な共同体と観念される。ひとりのアメリカ人は、2億4千万余のアメリカ人同胞のうち、ほんの一握りの人以外、一生のうちで会うことも、名前を知ることもないだろう。まして、彼には、あるとき、かれが一体何をしようとして

いるのか、そんなことは知るよしもない。しかし、それでいて、彼は、アメリカ人のゆるぎない、匿名の、同時的な活動についてまったく確信している。

(p.45～46)

この説に必ずしも同調する必要はないが、ここから受ける触感は、ほとんど柄谷が示そうとした「風景」に近い。それはともかく、アンダーソンは、ここから、文化と時代を異とする四つの小説の検討へと移っていく。

ここで取り上げられるのは、次の4作である。

- ① ホセ・リサル『ノリ・メ・タンヘレ』：フィリピン（1887）
- ② フランシスコ・バルタサル『アルバニア王国におけるフロランテとラウラの物語』：フィリピン（1838）
- ③ ホセ・ホアキン・フェルナンデス・デ・リサルディ『エル・ペリキーリョ・サルニエント（むずむずオウム）』：メキシコ（1816）
- ④ マス・マルコ・カルトディクロモ『黒いスマラン』：インドネシア（1924）

これらにみられるのは、「小説の「内的」時間から〔マニラ〕の読者の日常生活の「外的」時間へ」（p.48）のはめこみ（①）であり、それは②についてルンベラが指摘するように、「会話によるフラッシュバック」（p.49）を唯一の話法とする時間構成とは明らかに異なるものであることが述べられている。そして、そこには「フーコー的な意味での断絶」が介在しているという。

また、③については、「国民主義」小説といったジャンルのラテン・アメリカにおける最初のものであるらしいが、ここでも、「ひとりぼっちの主人公が小説内の世界と、その外の世界を溶接する確固とした社会学的風景のなかを移動していく」（p.51）のであり、そこに明確な「国民的想像力」の作動がみられる。そして③においてそれは、複数形の行列が、社会学的堅牢さを保証する牢獄を構成するのであり、「この植民地の抑圧性を表象する、そうした牢獄でいっぱい社会空間を目の前に思い浮かばせる」ことが強調されている。

そして④でみられるのもまた、「複数形の世界」であり、「暦の時間となじみの風景」（p.53）である。だが、そこには一つの新しさとして、名のない主人公が一貫して「我らが青年」として言及されているという事態が生じている。アンダーソンは、この「われわれ」には明らかにインドネシア人の「想像の共同体」が胚胎していることを見て取っている。この想像された「われわれ」からはオランダ人検閲官は排除されているのである。

++ 最後に、想像の共同体は、我らが青年が読んでいるということを我々が読むという二重性によって確認される。彼はぬかるんだスマランの道端で貧しい浮浪者の死体

を見るのではない、新聞の活字から想像するのである。彼は死んだ浮浪者が一体だれなのか、そんなことはまったく気にしない。彼が考えているのは浮浪者が代表する人間集団であって、一人の人間の生ではない。(p.54)

ここで新聞は、「文化的生産物」として想像のつながりを生起させるものとみなされている。この想像のつながりを生じさせるのは、ひとつは「新聞上の日付」であり、これこそが「ゆるぎなく前進する均質で空虚な時間を提示する」(p.55)。そして、今一つの要因として、「本の一形態としての新聞とその市場との関係」が取り沙汰される。

本とは、特別な意味における「最初の近代的大量生産工業商品」(p.56)であるとされる。それが、「正確に大規模再生産される別個の自己充足的な客体」(p.56)としての意味である。「本は、一冊毎に、隠者のように自足している」。

そして新聞は、「途方もない規模で販売されるが、その人気たるやきわめてはかない本」である。新聞が読まれているとはどのような意味をもたらすことなのか。

++ このマス・セレモニーの意義—ヘーゲルは、近代人には新聞が朝の礼拝の代わりになったと言っている—は逆説的である。それはひそかに沈黙のうちに頭蓋骨の中で行われる。しかし、この沈黙の人々、その存在については揺るぎない自信をもっている、それでは一体それがどんな人々であるかについてはまったく知らない、そういう人々によって、同時に模写されていることをよく知っている。そしてさらに、このセレモニーは、毎日あるいは半日毎に、歴年を通して、ひっきりなしに繰り返される。世俗的な歴史時計で計られる想像の共同体を、これ以上に髣髴とさせる象徴として他になにがあろう。(p.57)

このような想像を繋ぎ留める、「文化的生産物の深い虚構性」(p.55)は、こうして生動する。アンダーソンに従うなら、「古来の三つの基本的文化概念が公理として人々の精神を支配することができなくなったとき」(p.58)はじめて「国民」を想像する可能性が開かれる。そして、何がこれらの減衰をもたらしたかについては、次章以降で詳説されるのであるが、ここではそれが「出版資本主義」であることが予告されている。「出版資本主義こそ、ますます多くの人々が、まったく新しいやり方で、みずからについて考え、かつ自己と他者を関係づけることを可能にしたのである。」(p.59)

III 国民意識の起源

かくして、「商品としての出版物」(p.72)の形成において、「まったく新しい同時性の観念」が生み出され、それまでの宗教共同体や王国にとって変わる、新たな「水平・世俗的、時間・横断的」タイプの共同体が可能となる地平が開かれることが予見されたが、その中から **nation** だけが突出してポピュラーな地位を獲得するようになった理由

は、ここまでの叙述では未だ明らかにされていない。アンダーソンは、その要因が複雑で多様であることは言えるが、しかし、その核心には資本主義の伸長があると観ており、ここではそれを出版業の発展史において解析しようとしている。

リュシアン・フェーブルとアンリ＝ジャン・マルタンの『書物の出現』を引用しつつ、書籍出版も、先ずは初期資本主義に宿った「市場追求の衝動」につき動かされ、ヨーロッパ全域へと広がっていく様子が示される。しかし、この初期出版資本主義の市場は「広範に存在してはいても薄い層に限られていた」(p.73) ラテン語読書人に限られており、それが次第に出版資本主義それ自体の障害となってくる。ラテン語は、二言語併用者の言葉であり、人類の圧倒的多数は、当時も今もそして今後の来るべき数世紀においてさへ一言語だけを話す人々であるだろう。とすれば資本の抱え持つ市場原理からして、それはやがて圧倒的多数の者を購買層とできる俗語化を強力に推進することになる。

アンダーソンが描き出す資本主義の役割は大略このようなものであるが、ここに生じた俗語化の動きは、次の「三つの外的要因によってさらに加速され、そのうち二要因は、国民意識の出現に直接貢献することになる」と指摘されている。

① ラテン語の性格それ自体の変化

ラテン語テキストの書かれているという地位自体による秘儀性から、なにが書かれているかという言語それ自体による秘儀性への移行。

② 宗教改革の衝撃

ルターのドイツ語訳聖書の驚異的な成功に端を発する俗語出版の大衆化と、急速な読者公衆の創出。

③ 行政俗語の誕生

絶対君主たらしとする王たちが行政の中央集権化の手段とした特定の俗語の地理的かつ不均等な拡大。(英仏の事例)

しかしこれら三つの要因は、「新しい想像の国民共同体」(p.79)の出現にとっては、「キリスト教世界という聖なる共同体の腐蝕に貢献した」という消極的な意義をもつだけであり、それらの要因の例え全てが欠落していたとしても、その出現は生じたであろうという。では何が重要なのか。

++ 積極的な意味で、この新しい共同体の想像を可能にしたのは、生産システムと生産関係(資本主義)、コミュニケーション技術(印刷・出版)そして人間の言語的多様性という宿命性のあいだの、なかば偶然の、しかし、爆発的な相互作用であった。(p.79)

アンダーソンは、この中で特に「宿命性」の要素が決定的に重要であるという。宿命性とは、ここでは「死と言語」として捉えられているが、それは資本主義がどうしても征服できない「二つの強力な敵」であり、決して消去することのできない差異の源泉であるからである。しかし、これは「言語的多様性という一般的条件の意味」における宿命性であり、「特定の言語の原初的な宿命性」や「言語と特定の領土単位とのつながりを強調するナショナル・イデオロギーに共通の要素」(p.80)と同断のものではない。アンダーソンが強調するのは、このような宿命性と、「(出版)技術、資本主義のあいだの相互作用」である。そしてここに出版語が創造されるのである。

++ 出版時代以前のヨーロッパにおいて、そしてもちろん世界の他の領域においても、話者にとってかれらの生活を織りなす縦糸であり横糸でもある口語の多様性はきわめて大きなものだったので、かりに出版資本主義がこれらひとつひとつの口語を潜在的俗語市場として開発しようとしたら、出版資本主義はとるにたらない小規模なものにとどまっていたであろう。しかし、これらさまざまな個人言語は、ある明確な範囲内ではるかに少数の出版語に組み立てることができた。音声に対応するいかなる記号のシステムもすべては恣意的なものであること、これが組み立て過程を促進した。そして、親縁関係にある俗語の「組立て」に資本主義ほど貢献したものもなかった。それは、文法と統辞法の課する範囲内で、市場によって普及しうる、技術的に複製された出版語を創造したのである。(p.80)

アンダーソンがここで資本主義が果たした役割を重視するのは、印刷術それ自体の発明が、ヨーロッパに 500 年も先立って中国でなされているという事実を踏まえてのことである。

では、このようにして創造された出版語はどのようにして国民意識の基礎を築いていたのか。アンダーソンはここでも三通りの要因を指摘している。

- ① 出版語が、ラテン語の下位、口語俗語の上位に、交換とコミュニケーションの統一的な場を創造したこと。印刷と紙によってのみ相互了解の可能性を開かれた人々が、こうして出版によって、世俗的で、特定で、可視的な不可視性において国民的なものと想像される共同体の胚を形成した。
- ② 出版資本主義が言語に新しい固定性を付与したこと。印刷本という形態が、それまでの常に不安定で可塑的なものであった言語に、時間的かつ空間的な永続性をもたらし、同時に無限の複製可能性を与え、諸国の言語の変化を抑制し、「結晶化」をもたらした。

- ③ 旧来の行政俗語とは別種の権力の言語が創造されたこと。出版語の出現は、必ず、その言葉への親近性によって、種々の方言を再組織化し、そこに一つの権力の場を生じさせる政治的な働きを示した。

このようにして「出版語の固定化と口語間の地位分化」(p.82)が、想像の国民共同体を準備したとアンダーソンは言うのであるが、これは本来、「資本主義、技術、人間の言語的多様性」が爆発的な相互作用を起こすことにより生み出された、無自覚的な過程であるとされている。しかし、それが「ひとたび出現すると、それは模倣されるべき公式のモデルとなり」様々に利用されるようになる。タイの山地少数民族やトルコのクルディスタンの歴史はそのような作用による翻弄の歴史であることが認められる。

以上に述べられたことからアンダーソンは、次のように結論を下している。

++ 人間の言語的多様性の宿命性、ここに資本主義と印刷技術が収斂することにより、新しい形の想像の共同体の可能性が創出された。これが、その基本形態において、近代国民登場の舞台を準備した。これら共同体の潜在的広がりには本来的に限られたものであり、しかも同時に、既存の政治的境界（全体としてそれは王朝的拡張主義の高潮点を示すものであった）とは、きわめて偶然的な関係をもつにすぎなかった。
(p.83)

しかし、出版語の確立は、現実の国民国家の形成においては未だその端緒を成すものであるに過ぎず、「国民語」の分布と国民国家の領土の分布とが必ずしも一致していないことから、そこには未だ一つの不連続線が介在していることが窺える。アンダーソンはここからは、現実的モデルを検証してみるべきだと提唱している。それは一先ず西半球の旧植民地世界における国民国家の成立として提示されるだろう。

IV 旧帝国、新国民

ここでは、近代的な意味合いにおける **nationalism** の形成過程を検証するために、その具体例として西半球の植民地世界、「18世紀後半から19世紀初頭の新興アメリカ諸国」(p.90)における **nationalism** の勃興が取り上げられている。アンダーソンはこれらの事例が興味深いのは、**nationalism** の勃興に関するヨーロッパ的思考を支配してきた二つの要因――言語的差異、及び下層階級の政治的伸長――では説明がつかないからである、と述べている。すなわち、言語に関してはこれらのアメリカ諸国の人々はヨーロッパからの移入者であり、彼等が反発する当の相手との間に差異はない。また、後者の下層階級の政治的伸長こそが国民主義運動の進展をもたらしたとする見解（ここでも再びトム・ネアンの言説が引き合いに出されている）についても、これらの地域では、事情はむしろ逆であり、「下層階級」の政治的動員、すなわち、インディオあるいは黒人

奴隷の反乱への恐怖」(p.91～92)こそが、ヨーロッパ本国からの独立に拍車をかけたもの、と見られている。

では、彼等・Creole (クレオール：純粋なヨーロッパ系の出自を持つが、南北アメリカで生まれた者)は、いかにして nation の観念を発展させ、このような国民的独立運動の勃興を産み出し得たのであろうか、というのがアンダーソンの問題設定である。

++ なぜ、まさにクレオール人の共同体が、かくも早く、ヨーロッパのほとんどの地域よりずっと以前に、我々国民という観念を発展させたのだろうか。なぜ、多数の抑圧されたスペイン語を話さない住民をかかえるこれらの植民地において、そうした住民を国民同胞と意識的に再定義するクレオールが生み出されたのか。そしてスペインを、かれらがかくもさまざまに愛着をもっていたスペインを、外敵として再定義することになったのか。なぜ、ほとんど三世紀にわたって平穏に存在してきたスペイン・アメリカ帝国が、これほど突然に一八の別々の国家に分裂したのか？ (p.93)

一般に、これに対する回答として挙げられる要因は、18世紀のマドリッドによる支配強化と、自由主義的解放思想の普及という二つである。確かに、マドリッドによる税制の強化等による支配権の拡大はつぶさに観察できる事実であるし、大西洋横断コミュニケーションの改善による、新たな経済的・政治的教義の流入や、北アメリカ東部十三州(合衆国)の独立、フランス革命勃発の影響こそが、新たな独立国のほとんどの政体を共和主義(republicanism)で染め上げたというのも間違いではないだろう。

しかし、これらのことは、「なるほどスペイン領アメリカにおける抵抗への衝動を理解する上で重要ではあっても、それ自体としては、チリ、ベネズエラ、メキシコのような実体が、なぜ、感情的に受け入れられ、また政治的にうまくいくことになったのか、を説明するものではない」(p.95)。つまり、ここに生じたのは、新たな属地主義による諸国家の編成だったのであるが、それらがどうしてこのような諸国家の形態を取り、人々に受け入れられるようになったかを説明するには、「マドリッドの攻勢と自由主義の精神」だけでは不十分であるというものである。増して、この国家編成の担い手であるクレオール上流階級の大多数は、これにより財政的な破滅に陥っているのであり、そこには「ほんものの犠牲」が払われているという。

アンダーソンは、これを解きあかす鍵は「南アメリカの新生共和国が、かつてはそれぞれ、16世紀から18世紀にかけての行政上の単位にあった」という事実にあるとしている。アンダーソンによれば、このような南アメリカの行政単位の形成は、多分に恣意的かつ偶然的なものであり、それを決定したのは「そのときどきに行われた軍事的征服の空間的限界」(p.96)によるものであるらしい。だが、このたまたまそこに線が引かれたに過ぎない行政単位は、地理的な要因等から、次第にそれぞれに自立的性格を持つよ

うになる。しかし、彼は「「自然」地理的、あるいは政治・行政的市場圏は、それ自体としては、人々の愛着を生み出しはしない」(p.97)と見ている。

彼はそれを、次のような言葉で表明している。「一体、だれが、コメコンや EEC のためにすすんで死のうとするだろう」。

ここに窺われるように、アンダーソンが、nationalism が nationalism として成立するひとつの重要な契機とみなしているのは、共同体の構成員たちの、その共同体や共同性に対する愛着 attachment であり、その愛着は彼ら自身の死をも容認するものである。

そして、このような愛着を、これらのクレオールの人々のあいだに芽生えさせたのは、上記のような行政単位のうちに生起した、政治的な中心地をめぐる世俗的な巡礼の道の成立にあるのではないか、という仮説が提起される。

アンダーソンは、「旅」を「意味創造の経験」として、「時間・地位・空間」の構造的編成として捉えるヴィクター・ターナーの分析やマルク・ブロックの『封建社会』の歴史記述を援用しつつ、古い宗教共同体における宗教的巡礼を、壮大な想像行為として捉え、そこに中心性の経験が劇的な意味として生じてくるのだ、と言っている。

++ ここでの我々の目的からすれば、旅の典型的様式は巡礼である。それは、キリスト教徒、ムスリム、ヒンドゥー教徒にとって、ローマ、メッカ、ベナレスが、聖なる地理の中心として観念されたというだけでなく、さもなくば何の関係もないはずの遠隔の地からこれらの中心へと巡礼者が不断に流れ、これによって中心性が経験され（演出法的意味で）「実演される」ことにあった。実際、ある意味では、古い想像の宗教共同体の外縁は、人々がどこに巡礼するかによって決定されたのだった。(p.97)

この中心性の経験が、人々の想像のうちに共同性の観念をもたらすのだが、古い宗教共同体は、同時にこれに対応するような世俗的な旅を持っていた。だが、この世俗的巡礼路は、「絶対主義王制の台頭」、そしてそれに続く、「ヨーロッパを中心とする世界帝国の登場」(p.99)によって質的な変容を被る。

アンダーソンは、これを封建貴族の場合と絶対主義の役人の場合の対比として図式化している。前者の旅は、封建君主のいる中心と先祖伝来の領地との間の単線的な往還の旅である。しかし、これに対して絶対主義の役人の旅では、中心は自らの才能によって攀じ登らなければならない価値の頂上として観念され、その行程は複雑な螺旋を描き出すことになる。

++ 彼は、五等級の役人としてA町に派遣されて役人としての経歴を開始し、四等級で中央に戻る。ついで三等級でB州に赴任し、さらに二等級でC王領に行き、最後には、その巡礼を一等級で首都において終える。(中略)そして、彼は、その上昇らせ

んの道程において意欲的な巡礼仲間としての同僚の役人たちと出会う。彼が聞いたこともないような場所、会いたいとも思わない家族出身の同僚の役人たち。しかし、旅の道連れとして彼らと行を共にするうち、そしてとりわけ、単一の国家語を共有するとき、相互連結の意識（「なぜ我々は・・・ここで・・・一緒にいるのか」）が芽生える。（p.99～100）

このような共同体内の「人的互換性」が絶対主義の王制下ではじめて成立する。そしてさらに、標準化された国家語の発達、共同体内の人的互換性を補強する文書の互換性を生み出し、このような世俗的共同体の経験を促進することになる。

南北アメリカのクレオールに目を転じてみた場合でも、原理的には、このモデルが新旧両大陸にまたがる大官僚制として発展し、拡大していくだけの筈であった。しかし、実際には旧大陸以外の地で生まれたクレオールと本国人との間には、この両大陸を隔てる大西洋のような懸隔が存在した。クレオールの描く螺旋の頂上は、決して大西洋を越えることはなかったのであり、なおかつ南北アメリカの地では人口の極僅かな部分を占めるに過ぎない本国人（スペインの半島人）こそが、この地でも支配者であった。

++ たとえ父親が移住して一週間もたたないうちに生まれたとしても、彼がアメリカで生まれたという偶然は、言語、宗教、出自、礼儀作法、いずれにおいてもスペイン人となんら違いがないにもかかわらず、彼に従属的地位をあてがったのだ。それに対してはどうすることもできなかった。彼はクレオールであり、それは手の施しようのないことだった。（p.102）

本国側に、こうした排斥が合理的であるような態度を取らせた要因としては、「生物学的、生態学的汚染概念が成長」とそのマキャベリズムとの結託（p.102）、史上初の膨大な数にのぼる海外同胞の生成、現地人との混血児（ユーラメリカン等）の出現、「気候と「生態」が文化と性格に本質的影響を与えると論じたルソーやヘルダー」（p.105）等の啓蒙主義思想家の著作の広範な影響、等が挙げられている。

しかし、このようにして、クレオールたちが宿命的な閉塞感とともに、次第に自分たちの独自の共同性の観念を自覚しつつあったとしても、それは非常に狭い範囲の出来事であり、それのみでは新たな **nation** の構成にはいたらなかったであろう。そこから先を切り開いたのは、やはり出版資本主義の到来なのである、とアンダーソンは述べている。

++ この世界は、半島人とクレオールの衝突もふくめて、18世紀末におけるアメリカの国民意識出現以前の世界であった。副王領内でのせまにかざられた巡礼の旅は、

その領域的広がりや国民として想像されうようになるまで、言い換えれば、出版資本主義の到来まで、何ら決定的帰結をもたらさなかった。(p.106)

この地では、出版それ自体の普及は比較的早かったが、それらは「2世紀に渡って王権と教会の厳しい管理下に置かれ」(p.106)でいたという。しかし、18世紀に至って、膨大な種類の新聞が発行されるようになり、状況が変わってくる。初期アメリカの新聞発行の担い手は印刷業者自体であり、彼ら自身がジャーナリストを兼ねるようになる。また、読者を確保するために郵便局長との同盟が成立する。これらは特に北アメリカに顕著な現象であったが、18世紀後半にはスペイン領アメリカでも最初の地方新聞が発行されることになる。

これらの新聞は、先ずヨーロッパ本国に関するニュースと、商業ニュース、それに植民地における政治的任命を告知する媒体として登場した。そしてそこに次第に政治的要素が入り込むことになる。アンダーソンはこれらの新聞の特色として二つのことを指摘している。

その一つは豊かな地方性であり、その地方性の色濃さはヨーロッパ本国に帰属する人たちの読者を遠ざける作用を生じさせた。「植民地のクレオールは、機会があればマドリッドの新聞を読んだかもしれないが（しかし、そこには彼の住む世界については何も書かれていない）、同じ通りに住む半島人の役人の多くは、できることなら、カラカスの新聞など読もうとはしなかったであろう」(p.108)。

もう一つの特色は、「自分たちの世界と併存する世界」他の植民地地方の人々の読者を十分に意識して記事が書かれていたということである。

アンダーソンによれば、「スペイン領アメリカ初期ナショナリズムの二重性格、広大な空間的領の広がりや地方割拠性との併存」を生み出したのは、これらの新聞が共通に示していた上記のような特色によるものである。ここから次のような事態が生じている。

++ スペイン領アメリカいたるところで、人々はみずからを「アメリカ人」と考えたのであり、ここで「アメリカ人」という言葉は、まさにスペインの外で生まれたという共通の運命を指し示していたのであった。(P.108)

だが、スペイン領アメリカのクレオールたちは、「永続的なスペイン領アメリカ全域に及ぶナショナリズムを生み出すのに「失敗した」」(p.109)。それは、その広大な広がりや、それらの全ての地域を貫く同時性を想像させることを困難なものとしたのと同時に、当時の資本主義の技術的水準におけるスペインの後進性を反映したためであるという。

これに対して、北アメリカの WASP のクレオールたちは、この困難な統一を成し遂げた訳だが、当初の十三州は比較的狭い地域にまとまって相互の連結がうまく保たれたからであり、西部のフロンティアが拡大するに従って、これらが縮小や分裂に陥る幾度かの危機が観察されるのであり、それらの危機は中南米のクレオールが直面した状況と本質的な類似を示している、とアンダーソンはみている。

以上に述べられてきたことから、アンダーソンは、これらの議論の限界と範囲を確定しようとする。ここで取り扱われているのは、「1760 年から 1830 年にかけて西半球に起こった本国に対する抵抗」(p.110) であるが、これによって説明しようとしているのは、この抵抗の社会経済的基礎ではなく、「なぜ、抵抗が、他の形態においてではなく、複数の「国民的」形態において概念化されたのか」(p.111) ということであるという。

++ 私がここで提起していることは、経済的利害も自由主義も啓蒙主義も、それ自体としては、これら旧体制の強奪から守るべき想像の共同体の種類または形態を創造することはできなかったし、創造しなかったということにある。つまり、別の言い方をすれば、経済的利害、自由主義、啓蒙主義などは、視野の中心にある憧憬ないし嫌悪の対象に対立するものとしての新しい意識の枠組み (frame work) ——ほとんど意識されないでいながら、その視野を規定し、それを通して我々がみる眼鏡のフレーム——を提供するものではなかった。この特定の任務の達成のために、遍歴のクレオール役人と地方のクレオール印刷業者は、決定的な歴史的役割を演じたのである (p.111)

V 古い言語、新しいモデル

前章で論じられた南北アメリカの抵抗運動、「国民解放運動」(p.120) は、19 世紀に一応の成功を見て幕を閉じる。しかし、それは同時にヨーロッパにおけるナショナリズムの時代の始まりを告げるものである。

この一見新世界から転移したような旧世界におけるナショナリズムの勃興には、「アメリカのクレオール・ナショナリズム」と一線を画す、次のような二つの特徴が見られる。

- ① ほとんど全てのケースにおいて、「国民的出版語 (national print language)」がイデオロギー的かつ政治的に中心的な重要性を担っていたこと。
- ② クレオール諸国やヨーロッパにおける豊富な先例を現実的なモデルとすることができたということ。

従ってヨーロッパでは、nation は「徐々にはっきりしていく視野のフレームというより、はじめから意識的に達成すべき対象となった」(p.120)。ここに例えば、ヘルダーの如き人が、あられもなく次のような偏狭な言明を吐き出してしまうような事態が生起する。「あらゆる民 (folk) は国民 (Folk) であり、それ自身の国民的性格とそれ自身の言語をもつ。」(p.121)

アンダーソンは、このようなヨーロッパ的国民概念（彼はこれを「夢」と呼んでいる）が形成された淵源には、14 世紀に始まる「ヨーロッパ世界の深刻な時間的・空間的縮小」とみている。そしてこれを引き起こしたのは、当初は人文主義者の「古典」発掘によるものであり、後にはヨーロッパの全地球的拡大という事態がそれを促したとしている。このような理論構成に際しても、再びアウエルバッハが参照されているが、この古典古代の文化へのまなざしが、それに明確に対立させるようなかたちで、これまでに聞いたことのないような「近代」という概念を生み出すことになる。

++ 人文主義がその光を放ち始めて以来、古代の伝説や物語、さらには聖書の中の出来事が、歳月のへだたりという点からばかりではなく、生活条件が全く違うという点からも、自分たちの時代とかけへだたったものであるという観念が生まれはじめた。古代の生活形式と表現形式の復興をもくろむ人文主義は、我々の知るそれ以前のいかなる時代ももっていなかったような奥行きのある歴史的視角を生み出した。人文主義者は古代を歴史の奥にあるものとみて、この古代を背景とし、その間にはいるものとして中世の暗黒時代をながめる。・・・[そしてこれによって] 古代文化のあの自足して自己の世界の中に生きる素朴な態度や、十二、三世紀の無邪気な歴史感覚に再び立ち戻ることは不可能となった

(p.121～122, アウエルバッハ『ミメシス』, 筑摩叢書, 下巻 p.69)

そして 16 世紀、ヨーロッパによる広大な地理上の発見の衝撃が、ユートピア主義の隆盛をもたらす。トマス・モアの『ユートピア』(A.D.1516)、フランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』(1626)、ジョナサン・スウィフトの『ガリバー旅行記』(1726) は、いずれもユートピア主義の産物だが、これらの特徴は、その目的が「当時の社会に対する批評」(p.123) でありながら、どこか余所にある同時代のものとして描かれているということである。このことは、社会批判を行うに際して、既に遙かな古代にモデルを求める必要がなくなったことを示している。

そして啓蒙主義の時代の先覚者たちは、「現下のヨーロッパの社会的、政治的制度に対する破壊的な著作を著すのにますます「現実の」非ヨーロッパ世界」(p.123) を利用するようになる。ここに、ヨーロッパ文明が決して唯一の、神に選ばれた文明ではない、という相対性の認識が生じる。

このような認識は、次に「言語に関するヨーロッパ的観念」(p.124)にも革命をもたらす。イギリスのベンガル征服から生じたウィリアム・ジョーンズのサンスクリット語研究(1786)、ナポレオンのエジプト遠征から生じたジャン・シャンポリオンによるヒエログリフの解読(1835)により、ヨーロッパ外の古代が複数化され、セム語研究の進展は、ヘブライ語の起源を、他のセム語系統の言語と同列の位置にまで格下げしてしまう。philology が成立し、あらゆる言語がその分類表のなかに再配置され、聖なる言語は、俗語と対等の位置にまで降格されてしまう。あらゆる言語は原理的な平等という価値を持つことになるのである。

シートンワトソンが提示するように、19世紀は「俗語の辞典編纂者、文法学者、言語学者、文学者の黄金時代」(p.125)であり、彼らはヨーロッパにおけるナショナリズム形成の中心的な役割を担う。二言語辞書の編纂、図書館の隆盛、学校と大学の進歩は19世紀ヨーロッパにおいては、ナショナリズムの進展をそのまま反映するものである。

++ 我々は、したがって、この辞書編纂革命の軌跡を、弾薬庫に火がついて、一つまた一つと小さな爆発が起こっては次の爆発を誘発し、ついには轟音とともにすべてを覆い尽くす火が夜を白日と化してしまう、そういう情景としてたどることができよう。(p.126)

18世紀半ばには既に、「現存する事実上すべてのギリシア古典のテキストが、しかるべき文献学的、語義的補注と共に、手頃な出版物として利用できるようになり、絢爛たる異教文明、古代ヘレニズム文明が再生された」。(p.126)更に、18世紀末には、東欧において、ルーマニア語、チェコ語、ハンガリー語において広範な出版活動が巻き起こり、19世紀に入るや、北部バルカンで、スロヴェニア語、セルボクロアチア語、ブルガリア語といった相異なる文学語が成立する。また公定ロシア語文法の成立(1802)に遅れること僅か17年で最初のウクライナ語文法が出版されている。

また、同時期の北欧においては、フィンランドのフィン語、ノルウェーのノルウェー語に同様の民族的「目覚め」が訪れており、これらの運動は全て、これらの地域におけるナショナリズムの出現と密接に結びついている。また、楽譜という別のかたちの印刷物においても、これと平行するような俗語化が進んでいた。(国民楽派の成立)

では、このような運動を引き起こした、「辞典編纂者、言語学者、文法学者、民俗学者、政治評論家、作曲家」(p.131)の活動は誰によって支えられていたのか。アンダーソンは、ここに勃興しつつあるブルジョワジーを位置づけ、それ以前の時代の支配階級の凝集性が、「言語の外で、あるいは少なくとも出版語の外で生み出さ」(p.132)れていたことと比較して、次のように語っている。

++ シヤムの支配者がマレーの貴婦人を妾に娶ったとき、あるいは英国王がスペイン女王と結婚したとき―かれらははたして真剣に「言語によって」語りあうことがあったのだろうか。連帯は、親族関係、庇護関係、人格的忠誠の産物であった。(中略) 伝統的貴族の規模が比較的小さかったこと、かれらの政治的基盤の固定していたこと、性交と相続によって政治的關係が人格化されていたこと、こうしたことは、階級としてのその凝集性が、想像によるだけでなく、きわめて具体的なものであったことを意味した。文盲の貴族はなお貴族として振る舞うことができた。しかし、ブルジョワジーはどうであろうか。比喩的に言えば、それは、きわめて多くの複製によって始めて一つの階級として立ち現れた存在であった。リールの工場主はリヨンの工場主と共鳴によってのみ結びついていた。かれらがおたがいの存在を知る理由など何もなかった。かれらは必ずしもおたがいの娘を娶るとか、おたがいの財産を相続するとかしたわけではない。にもかかわらず、かれらは出版語によってかれら自身の数千の同類の存在を一般的にありありと心に思い浮かべるようになった。(中略) こうして、世界史的観点からすれば、ブルジョワジーは、本質的に想像を基盤として連帯を達成した最初の階級であった。(p.132~133)

だが実際には、ブルジョワジーだけがそっくりそのまま、このような「言語学的革命」(p.133)の消費者であったわけではなく、「貴族、郷紳、専門職業者、役人、市場の人々」といった雑多な諸階級が、地方によって独自の人員構成を示していた。また、ヨーロッパでは南北アメリカと異なり、「権力(王朝の領域)と出版語は違う領域地図を描いて」(p.134) いることから、より複雑な様相を呈していた。

しかし、いずれにしてもこの間に「俗語国家語」は、次第に強大な権力と地位を帯びるようになり、「すでに従来その出版語を使用していた臣民に非常な優位を保証し、したがって、それに応じて、この言語を使用していなかった人々を脅かすものとなった」(p.135)。アンダーソンは、このようにヨーロッパにおけるナショナリズムの進展を、「[下級郷紳、学者、専門職業者、実業家の]読書連合」(p.136)の発展過程として繰り広げてみせるわけだが、それは、トム・ネアンが立てる定式「ナショナリズムを唱道する新しい中産階級インテリゲンチアは、大衆を歴史に招き入れねばならなかった。そしてその招待状はかれらの理解する言語で書かれねばならなかった。」(p.137, *The Break-up of Britain*, p.340)にある程度適合するとみている。しかし、その招待をこの上なく魅力的なものにみせ、かくもさまざまな同盟がその招待状を発送することができたかについては、横行する海賊行為について考察する必要があるとしている。

例えば、フランス革命が、数知れぬ人々の捉えがたい経験の集積から、今認められるようなフランス革命として一つの概念を構成するようになった理由は、限りない論争のテーマとなっているが、「それがそれとしてあること」について以後疑いを差し挟むものは誰もいなかったという。

これと同様に、「南北アメリカの独立運動は、それについての出版が行われるようになる」とすぐに、「概念」、「モデル」、そして実に「ブループリント」となった」

(p.138)。そこに生じたのは、新たな諸概念の沸騰する奔流であり、その混乱の中から、「想像の現実 (imagined realities) が姿を現した」(p.138) ののである。

++ こうして、事実上、遅くとも 1810 年代には、「この」独立国民国家のモデル」が、海賊版製作のために利用できるようになっていた。しかし、まさにそれがすでにこのときまでに周知のモデルとなっていたが故に、そこでは一定の「規格」が要求され、そこからはっきりと逸脱することは許されなかった。(p.139)

正規のものではない無数の印刷物が、あらゆる要素の混淆の中から、初期ヨーロッパ・ナショナリズムに固有の性格を刻みつける。一つの俗語国家語は、その俗語の話者全ての集合体を、それが指定する国民国家の主権の究極的所在と認定する。「それは当然の帰結として、農奴制の解体、民衆教育の推進、参政権の拡大などをも意味した」(p.139) のであり、「人民主義的」性格を根深いものとしたのである。

VI 公定ナショナリズムと帝国主義

○19 世紀後半の言語学・辞書編纂革命とヨーロッパにおける国民主義運動の昂揚

○啓蒙専制君主等による特定の出版俗語の国家語としての採用

～オーストリア・ハンガリー帝国のヨーゼフ II 世によるドイツ語の採用

○王権の国民的観念への帰属の形成

～ヨーロッパ諸君主の「帰化 (naturalization)」

○「公定ナショナリズム」(シートンワトソン) という現象の生起

～帝政ロシア化：「国民(nation)のびっちりとしきしまった皮膚を引きのばして帝国(empire)の巨大な身体を覆ってしまおうとする策略」(p.150)

公定ナショナリズムー国民と王朝帝国の意図的合同という、勃興する民衆的国民運動に対する事後的反動

○ロシアにおける公定ナショナリズム

～アレクサンドル III 世時代

○イギリスにおける公定ナショナリズム

～ヴィクトリア朝

○明治政府の日本における公定ナショナリズム

～プロシアをモデルとした帝国主義的展開

○シャムにおける公定ナショナリズム

～植民地官僚国家をモデルとした外国人労働者の活用

○ハンガリーにおける多民族問題

- オーストリアにおける社会主義的な公定ナショナリズム
～大オーストリア合衆国の構想

VII 最後の波

- 第一次世界大戦以後
 - ～国際連盟において、NATION STATE が正統的な国際規範として認められる
- 植民地ナショナリズムの成立
- 世俗的巡礼の旅の変貌と拡大
 - その3つの要因
 - ①産業資本の発達による交通の増大
 - ②帝國的ロシア化による国家の拡大と巡礼者のむれの増大
 - ③近代的教育の普及～現地語とヨーロッパ起源の言語との二言語併用を通して入手される、国民、国民国家モデル
- ナショナリスト・インテリゲンチアの植民地への登場
 - ～スワルディのインドネシアにおけるオランダ攻撃
- オランダによるインドネシア植民地人の枠付け（インランデル etc.）から「インドネシア人」が成立する
- ダカールを中心とする「西アフリカ人」の形成
- インドシナにおける国民意識の形成とその変遷
 - インドシナにおける教育政策の二つの目的
 - ①近隣の世界との政治的、文化的紐帯を断ち切ること・中国との繋がり
 - ②フランス語の使い手を増やし、官僚機構や企業の下僚として使うこと
- インドネシアと比較した場合の「インドシナ人意識」のはかなさ
- クオック・グによるヴェトナム人の文化的連帯の形成
- インドシナにおける教育の巡礼と行政の巡礼の不一致
- 言語一創造の共同体を生み出し、特定の連帯を構築する能力
- 20世紀のナショナリズムの特性
 - ①ラジオとテレビという、想像の共同性を更に拡大するような装置の出現
 - ②モジュール的性格～過去の三つのナショナリズムの形態（クレオールナショナリズム、民衆的ナショナリズム、公定ナショナリズム）をモデルとして頼ることができる
- 言語的多様性の中の国民～スイスの事例
 - 最後の波の中に位置づけられるスイスナショナリズム
- まとめ

VIII 愛国心と人種主義

○nation(国民)と愛

～ナショナリズムの文化的産物（詩、小説、音楽、造形芸術 etc.）がかくも繰り返して表現してきた「愛」

○これらの愛の表現は親族の語彙や故郷の語彙のように、人が自然によって結び付けられた言語によって語られる。自然なものは選択の圏外にあり、そこに無私無欲の崇高さが生じる。

○多数の普通の人々？にとって **nation** は利害の外にあり、それゆえに利害を超えた崇高な犠牲が要求できる。途方もない数の人々が、そのために自らの命を投げ出そうとする。

○言語の原初性と同時存在的な共同性／通時性と共時性？

○ナショナリズムと人種主義 **racism**

「ナショナリズムが歴史的運命の言語で考えるのに対し、人種主義は、歴史の外にあって、ときの初めから限りなく続いてきた、忌まわしい交接によって伝染する永遠の汚染を夢見ることにある。」（p.257）

○愛着の対象が常に「想像されたもの」であるということ

IX 歴史の天使

○ナショナリズムのモジュール化と革命モデル

「ボリシェヴィキ革命のモデルは、20 世紀のすべての革命にとって決定的であった。というのは、これによって、全ロシアよりももっと後進的な社会においても、革命が想像できるようになったからである。（それは、いわば、歴史を近道することを可能にしたのである。）」（p.274）

○ヴェトナム～モジュール化したナショナリズム移転された極端な例

○公定ナショナリズムと革命指導部の結託

○不死の歴史の天使

了